

国際専門家会議
「放射線と健康リスク」

2011年9月11日～12日
福島県立医科大学



国際専門家会議

「放射線と健康リスク—世界の英知を結集して福島を考える」

International Expert Symposium in Fukushima –Radiation and Health Risks–

会議の目的

日本財団は、笹川記念保健協力財団と協力し、1991年より10年間チェルノブイリ事故に汚染された地域に住む約20万人の児童の検診を実施し、WHO、IAEAなど世界にこの検診の科学的データに基づく情報を提供し、高く評価されています。この経験をもとに、福島原発事故による放射線被ばくの影響について、世界の英知を集め、科学的な検討を行うためにこのたび下記の要領で国際専門家会議を開催いたします。この会議は、福島県民の健康リスク問題を正しく評価し、今後予定される県民健康管理調査事業を支援すると同時に、新たな国際放射線安全防护に資する方策を考え、福島の復興に資することを目的としています。

セッションテーマ

- (1) 福島の現状：緊急被ばく医療対応と国内放射線保護安全規制
- (2) 放射線被ばくによる健康影響：低線量被ばくと健康、緊急被ばく医療の課題
- (3) 汚染地域における放射線量及び線量測定
- (4) 放射線生物学と放射線安全防护学：基礎と疫学、分子疫学
- (5) チェルノブイリ原発事故の教訓から学ぶ
- (6) 放射線安全と健康リスクに関するガイドライン
- (7) 今後の放射線健康リスク対応に関する提言

期日： 2011年9月11日（日）、12日（月）

会場： 福島県立医科大学 会議場（福島市光が丘1番地）

主催： 公益財団法人 日本財団

共催： 国際放射線防護委員会
笹川記念保健協力財団
福島県医師会
福島県立医科大学
放射線医学総合研究所

後援： 内閣府、法務省、外務省、文科省、厚労省、経産省、国交省、環境省、福島県

組織委員会： 笹川 陽平（委員長・日本財団会長）
紀伊國 献三（笹川記念保健協力財団理事長）
菊地 臣一（福島県立医科大学理事長兼学長）
丹羽 太貫（京都大学名誉教授）
山下 俊一（福島県立医科大学副学長、長崎大学教授）
David L. Heymann（英国王立国際問題研究所）
Fred A. Mettler, Jr.（国連科学委員会米国代表）

国際専門家会議

「放射線と健康リスク—世界の英知を結集して福島を考える」

2011年9月11日—12日 於福島県立医科大学

会議の背景と目的

2011年3月11日に発災した東日本大震災に引き続いて起こった、東京電力福島第一原子力発電所事故は、今日に至るまで未だ収束していません。この間、緊急被ばく医療対応についての諸課題が明白となり、同時に放射能環境汚染の中で困難な生活を余儀なくされている福島県住民の不安と不信は募るばかりです。現在の状況は、放射線安全防护に関する情報の錯綜による社会混乱を起こしているばかりか、地域コミュニティ崩壊の危機をも内包し、福島県の復興を困難なものにしかねません。国際的にも福島原発事故の実態とその放射線被害に関して日本から発信される情報は限られており、さらなる情報の開示が求められています。

そしてこの未曾有の原発事故から6ヶ月目を迎え、拡大した放射能環境汚染の中で、発電所近隣地域に居住していた避難民は塗炭の生活を余儀なくされ、また同時に、福島県内、県外を問わず、放射能汚染が心配される地域で子供を持つ家庭の親たちの心労には想像を絶するものがあります。発信源によって異なる報道内容が流れるという情報災害も加わる中で、科学的知見に基づく放射線健康影響について、正しく情報を発信し伝達する取組みが不可欠であります。

そこで、このたび、現在まで、放射線災害医療の学際的研究を重ねてきた世界の英知を集め、福島の実状を正しく掌握し、原発事故への健康リスク面からの対応を協議する場を設定することといたしました。世界の専門家からの適切な勧告を受け、放射線健康リスクに係る正しい情報とリスク認知のあり方を、福島のみならず世界へ発信することを目的として、日本財団主催による「放射線と健康リスク」の国際専門家会議を来る9月11日、12日の両日、福島県立医科大学で開催いたします。

30名に及ぶ外国人招聘者は、いずれも国連科学委員会や国際放射線防護委員会、国際原子力委員会、世界保健機関、さらに欧米旧ソ連からの各専門分野を代表する最前線の研究者です。今後の福島の復興・復活のためには、本会議での議論はきわめて重要であり、これを踏まえて、今後予定される福島県民健康管理調査事業を支援すると同時に、新たな国際放射線安全防护策に生かしていく予定です。

国際専門家会議「放射線と健康リスク」組織委員会

国際専門家会議：放射線と健康リスク
世界の英知を結集して福島を考える
2011年9月11日－12日 於：福島県立医科大学

プログラム

9月11日(日)

8:00-9:00

受付

9:00-9:45

シンポジウム開会

司会： 笹川記念保健協力財団 紀伊國 献三

英国王立国際問題研究所 デイヴィッド・L・ヘイマン

挨拶： 日本財団 笹川 陽平

福島県立医科大学 菊地 臣一

世界保健機関事務局長 マーガレット・チャン(ビデオ・メッセージ)

9:45-10:45

基調講演

「複合災害としての福島原子力発電所事故がもたらしたもの」

放射線医学総合研究所 明石 真言

「福島原子力発電所事故の影響に関する国際放射線防護委員会からの提言」

国際放射線防護委員会・アルゼンチン原子力保安局 アベル・J・ゴンザレス

10:45-11:00

休憩

11:00-12:30

セッション1： 福島の現状

座長： 福島県立医科大学 竹之下 誠一

東京大学 前川 和彦

「環境の放射能汚染と公衆の被ばく」

日本原子力研究開発機構 本間 俊充

「福島原子力発電所事故の教訓」

広島大学原爆放射線医科学研究所 神谷 研二

「福島原子力災害によってもたらされた内部被ばく」

放射線医学総合研究所放射線防護研究センター 酒井 一夫

12:30-13:30

昼食

- 13:30-15:15 **セッション2： 放射線被ばくによる健康影響：低線量被ばくと健康、緊急被ばく医療の課題**
- 座長： 放射線医学総合研究所 米倉 義晴
英国保健保護局 ティモシー・ウォーカー
「電離放射線暴露の医学的影響とリスク」
ニューメキシコ大学 フレッド・A・メトラー
「航空乗組員の疫学的調査～宇宙線による低線量被ばく」
ブレーメン大学 ハーヨ・ツェーブ
「環境放射線による被ばくに係わる健康リスク」
ワシントン大学 スコット・デービス
「放射線や原子力事故に係わる緊急時対応医療」
米国国立がん研究所 C・ノーマン・コールマン
「放射線疫学～福島展望について～」
国際疫学研究所 ジョン・D・ボイス Jr.
- 15:15-15:30 **休憩**
- 15:30-16:15 **セッション3a： 汚染地域における放射線量、線量測定と線量評価**
- 座長： 放射線影響研究所 大久保 利晃
ドイツ連邦放射線防護庁 ウォルフガング・ヴァイス
「放射線防護とリスク評価における放射線量の諸単位」
欧州合同原子核研究機構 ハンス-ゲオルグ・メンツェル
「放射性廃棄物による急性被ばくおよび継続被ばくの内部放射線量」
パシフィック・ノースウェスト国立研究所 ブルース・ネピア
「チェルノブイリ原発事故と核実験によるフォールアウト～線量測定と対策と疫学～」
米国国立がん研究所 アンドレ・ブーヴィル
- 16:15-17:00 **セッション3b： 放射線生物学と放射線防護学／安全：基礎と疫学と分子疫学**
- 座長： 放射線影響研究所 大久保 利晃
ドイツ連邦放射線防護庁 ウォルフガング・ヴァイス
「幹細胞からみた子宮内被ばくと低線量率被ばくの放射線リスク」
京都大学 丹羽 太貫
「原爆被爆者における放射線と発がんリスク」
放射線影響研究所 児玉 和紀
- 19:00 **福島ビューホテルにて懇親会**

9月12日(月)

9:30- 11:00

セッション4：チェルノブイリ原発事故の教訓から学ぶ

座長： 米国国立がん研究所 馬淵 清彦

イリノイ大学シカゴ校 アーサー・シュナイダー

「チェルノブイリの教訓を今後の福島に活かす：放射線影響」

ロシア医学放射線研究所 ヴィクトル・イワノフ

「チェルノブイリ原発事故における逆行的線量推定」

ウクライナ医学アカデミー ヴァディム・V・チュマック

「チェルノブイリ原発事故後のウクライナにおける甲状腺がん

～ウクライナ・アメリカ甲状腺プロジェクトの粹組み～」

ウクライナ内分泌代謝研究所 ニコライ・D・トロンコ

「チェルノブイリ原発事故の心理的影響」

ストーニーブルック州立大学 エヴェリン・J・ブロメット

「チェルノブイリ甲状腺組織バンク」

インペリアルカレッジ・ロンドン ジェラルディン・A・トーマス

11:00-11:15

休憩

11:15-12:45

セッション5：放射線安全と健康リスクに関するガイドライン

座長： 環境科学技術研究所 嶋 昭紘

国際放射線防護委員会 クリストファー・H・クレメント

「放射線防護の原則」

英国健康保護局 ジョン・R・クーパー

「発がんモデルと放射線防護」

マンチェスター大学 リチャード・ウェークフォード

「放射能汚染地域長期在住者の防護～ICRP Publication 111からの提言～」

フランス原子力防護評価研究所 ジャック・ロシヤール

「福島第一原子力発電所事故から学ぶ放射線防護の教訓」

大分県立看護科学大学 甲斐 倫明

12:45-13:45

休憩

- 13:45-14:45 **セッション6： 総括**
座長： 国際放射線防護委員会・アルゼンチン原子力保安局 アベル・J・ゴンザレス
 福島県立医科大学/長崎大学 山下俊一
 「福島原発事故に関する市民の反応と新たな視点」
 漢陽大學校 ジャイキ・リー
 「国連総会への科学報告の作成：東日本大地震・津波に続く原発事故
 による放射線被ばくについての国連科学委員会の活動の現状」
 ドイツ連邦放射線防護庁 ウォルフガング・ヴァイス
- コメント：
 国際原子力機関 イゴール・グセフ
 国際原子力機関 ジャン・ウオンデルゲム
 世界保健機関 T.エミリー・ファン・デベンター
- 14:45-15:00 **休憩**
- 15:00-16:00 **セッション6（続き）：総括**
 討議
 提言
- 16:00-16:30 **閉会式**
司会： 笹川記念保健協力財団 紀伊國 献三
 英国王立国際問題研究所 デイヴィッド・L・ヘイマン
- 17:00-18:00 **記者会見**
- 終了**